

平和と和解のメディアに

伊藤 英一*

- 1、平和への祈りを伝える
- 2、核廃絶への祈りを
- 3、戦争と平和のジャーナリズム
- 4、バチカンのメディア
- 5、棘いばらの道とメディア
- 6、平和の道具に
- 7、和解と「ヨーロッパの日」
- 8、平和と和解のメディアへ

1、平和への祈りを伝える

「和を以て貴しとなす」日本では、幸せなことに、和、特に平たいらかなる和、平和が当たり前のように感じられる日々が流れている。しかし、中近東をはじめとした地球上の多くの地域では、とても平和とは呼べない状況での苦しみが続いている。「平和はすべての人類が熱望する希望の対象、貴重な資産です」⁽¹⁾との言葉で、2020年1月1日恒例のフランシスコ教皇によるメッセージの端緒が切られた。毎年元旦が「世界平和の日」としてバチカンの主導で平和への祈念行事が行われているが、今回の行事は、その53回目にあたるものであった。

これに先立つ、2019年12月25日クリスマス（降誕祭／聖誕祭）当日のウルビ・エト・オルビ（urbi et orbi／ローマ市内と世界に向けての祝福の言葉）でも、平和と和解の大切さが説かれた。⁽²⁾

「中東や世界の様々な国で戦争や紛争に苦しむ多くの子どもたちに、キリストが光となりますように。」

ここ10年の、国を引き裂く対立の終結をいまだ見ることができないでいる、愛するシリアの人々に、キリストが慰めとなりますように。善意の人々の良心を揺さぶり、統治者や国際共同体に、地域の人々の安全と平和な共存を保証し、苦しみに終止符を打たせる解決を、見出させることができますように。⁽³⁾

このように始められた平和の祈りがカバーする地域は、中近東、東欧、中南米、アフリカ、と広範囲にわたっている。

また、教皇の降誕祭や新年の祈りとそのメッセージの内容を詳細に報道したメディアも、BBC、⁽⁴⁾エル・pais、⁽⁵⁾ニューヨーク・タイムズ、ウォール・ストリート・ジャーナル、ル・モンド等、数多に及んだ。⁽⁶⁾

降誕祭クリスマスや復活祭イースター/パスクなどは伝統的に平和と和解の場であり、平和と和解を祈る時なのである。

2、核廃絶への祈りを

これに約1か月先立つ2019年11月24日、教皇フランシスコは長崎において、平和であっても、核の抑止力に依拠した平和は欺瞞であり、不道德だと踏み込んだ。真の平和は、威嚇することや恐怖心を煽ることによるのではなく、相互の信頼に基づいたものでなければならぬと説いたのである。

1963年に聖ヨハネ23世教皇が、パーチェム・イン・テリス（Pacem in Terris／地上の平和）で、核兵器の禁止を世界に訴えた先例を引用しながら、「軍備の均衡が平和の条件であるという理解を、真の平和は相互の信頼の上にならしか構築できないという原則に置き換える必要があります⁽⁸⁾」と呼び掛けた。そして、アッシジの聖フランシスコに由来する「わたしをあなたの平和の道具にしてください（注(30)参照）」との祈りが述べられた。長崎に引き続き、その日の午後、広島平和記念公園における平和のための集いでも、核についての直截に切り込む言葉が発せられた。

「戦争のために原子力を使用することは、現代において、犯罪以外の何ものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、わたしたちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反します。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します⁽⁹⁾。核兵器の保有は、それ自体が倫理に反しています。」

ここでもパーチェム・イン・テリスから、「平和は、それが真理を基盤とし、正義に従って実現し、愛によって息づき完成され、自由において形成されないのであれば、単なる〈発せられることば〉に過ぎなくなると確信しています⁽¹⁰⁾」との言葉が引用されていた。このような教皇のメッセージは、インターネット、テレビ、ラジオ、新聞等々のメディアで世界に向けて伝達された。特に、地球環境の保全を含む世界平和の実現を志向することを明確に打ち出している現教皇による、ここ7年来のメッセージは、様々なメディアに平和というテーマについて伝える機会を提供して来ている。

また、2019年4月17日、サン・ピエトロ広場でのグreta・トゥーンベリ（Greta Thunberg）さんと教皇とのお互いの感謝と祝福のように、地球環境問題では若いスターも誕生し、良い相乗効果が表れていた。ここでは、「気候のために立ち上がり、真実を話してくださって、ありがとうございます。大変ありがたいです。」とグretaさんが礼を述べ、「神のご加護がありますように、取り組み続けなさい、続けるのです、前へ進みなさい。」と教皇が励ましたと報じられている。

3、戦争と平和のジャーナリズム

読む度に我々の内なる感動を呼び起こすトルストイの名作『戦争と平和』からも理解されるように、戦争と対峙しての平和というテーマは、長らく歴史上の課題として人間が直面してきた課題である。

しかし、現実のメディアやジャーナリズムの世界において、戦争と平和の両者が均等に扱われている訳ではない。ことの善悪はさて置き、戦争を巡るのテーマを競って取り上げる方が圧倒的に多く、人々の関心を引き付け、採算性も高い。逆に平和を話題として持ち出すことは少なく、関心も呼ばず、また商売としては成り立たない。

勿論、ジャーナリストは戦争のプロパガンダに加担し、時には火に油を注ぐような報道を続けることもできる。しかし、反対に、平和のために対話を促し、調停や和解を介添えする役割を果たす

こともできる筈である。⁽¹²⁾1960年代にノルウェーの社会学者ヨハン・ガルトゥング (Johan Galtung) をはじめとした人々が唱導した平和ジャーナリズム、あるいはAFP財団による和解のためのメディアの役割推進の試みなど、列挙できる例は数多ある。後者のような例の一つに、2020年5月に54周年を迎える、「世界広報の日」の開催がある。日本では「世界広報の日」と訳されているが、1967年に教皇パウロVI世によって^{ベンテコステ}聖霊降臨祭の前の日曜日、即ち復活祭後の第6日曜日を、新聞やテレビ等の様々な社会的メディアを考察する日、⁽¹³⁾「社会コミュニケーション記念日」とされたことで始まったものである。

一昨年 (2018年) 5月のこの日のテーマは、「フェイクニュースと平和ジャーナリズム」であった。そのテーマは、新約聖書のヨハネによる福音書8章32にある「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」⁽¹⁴⁾から選ばれたという。

その日に寄せたメッセージの中で、フランシスコ教皇は、平和ジャーナリズムの役割は、世界の大部分を占める人々の声なき声に尽くすため、「紛争の真の原因を調査し、根源からの相互理解と好循環による紛争克服に取り組むこと」⁽¹⁵⁾であると説いた。

また、昨年 (2019年) のテーマは、「ソーシャル・ネットワーク・コミュニティから人間共同体へ」だったが、これは、新約聖書に収められているエフィソの信徒への手紙 (4章25) に収められた「偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いにからだの一部なのです」⁽¹⁶⁾から採用されている。

更に、今年 (2020年) の「世界広報の日」 (5月24日) のテーマは、旧約聖書の出エジプト記10章2から採用され、「あなたが子孫に語り伝える」⁽¹⁷⁾ことができるように、人々の人生から形成される歴史を考察する旨が発表されている。教皇が世界平和とコミュニケーションのために「語り伝える」ための記憶が大切であると考えていることは、『焼き場に立つ少年』⁽¹⁸⁾の写真を2017年頃から機会を捉えては配布展示していることや、長崎・広島での証言について「子孫に語り継ぐために」⁽¹⁹⁾記憶が重要だと、再三再四、説いていることから伺える。⁽²⁰⁾そして、その記憶を平和実現のために動的に現実化して行こうと意図しているものと推測される。この日のためのメッセージは、カトリックにとって作家とジャーナリストの守護聖人とされる聖サレジオの記念日 (1月24日) に公表される予定である。

4、バチカンのメディア

バチカンは44ヘクタール (= 0.44km²) の領域に過ぎない世界最小国ではあるが、聖なる都市 (città sacra) として世界中の13億人にのぼる信徒が形成するネットワークに支えられた世界最大級の情報メディア国とも言える側面がある。

ラテラノ条約によって、1929年、サヴォワ家のイタリア王国による制約から脱したバチカンは、地球上のすべての信者に教皇の声を直接届けるために短波放送を計画し、グリエルモ・マルコーニ (Guglielmo Marconi) のマルコーニ無線電信会社に建設を付託した。

バチカン放送 (Radio Vatican; Statio Radiophonica Vaticana) は、1931年2月11日、マルコーニによる短い挨拶の後、教皇ピウスXI世の声により開局された。

更に、1936年には国際無線電信連合 (1947年に万国電信連合と統合、現在の国際電気通信連合/ITU) から全世界への発信が認められている。ちなみに、グリエルモ・マルコーニは、翌1937年

にその生涯を閉じている。更に、1939年2月には、バチカンと世界の人々との新しい結びつきを模索したピウスXI世が逝去、第二次世界大戦勃発の7ヶ月前のことだった。

1952年には、バチカンから北北東へ18キロの距離にあるローマ第14区サンタ・マリア・デイ・ガレリアに424ヘクタールの通信所用地が特権免除の対象として用意された。バチカン市国本国の約十倍の広さであり、モナコ公国の約2倍、アンドラ公国よりやや小さい領域である。ここから、短波や中波による放送サービスを拡充、500キロワット中継器による極東、ラテンアメリカへのサービスなどの基礎が築かれた。ちなみに、日本の海外向け短波放送「NHKワールド・ラジオ日本」の送信を担っているKDDI^{やまた}八俣送信所は100ヘクタールと東京ドーム22個分の広さであるが、それでもバチカンのサンタ・マリア・デイ・ガレリア通信所の4分の1弱の規模に過ぎない。

1990年代後半からのインターネット時代に入ってから、このような広大な通信基地の必要性は薄れつつあるものの、地球上をくまなくカバーするためと非常時に備えての一定の任務は保持されている。一方で、新サービスの拡大にも積極的に取り組むと共に、組織のスリム化も進められてきた。

バチカンは無線の時代、グローバルかつユニバーサルなメディアの時代の先端を走って来たと言える。⁽²¹⁾

2017年12月以降は、バチカン・ニュースを中心としたマルチメディア、多言語による放送を行っている。もっとも1959年2月から始まった短波放送による日本語放送が2001年に廃止された例からも伺えるように、使用言語の縮小傾向は否めないが、厳しい財政難にもかかわらず、なかなかの健闘振りを示している。

ラテラノ条約によって領土的拡張への可能性を失ったことを、逆にバチカンは地理的制約に囚われないで済むというメリットとして生かす足掛かりとしたのだ。今では、地球的規模の情報ネットワークの可能性を存分に生かせる真にグローバルなメディア国家として機能している。

5、^{いぼ}棘の道とメディア

しかし、平和を唱道する道は決して平坦なものではなく、^{いぼ}棘の道である。

フランシスコ教皇が長崎と広島で核廃絶にまで踏み込み、核による抑止効果に依拠した安全保障は不道徳かつ欺瞞であると述べたことは、フランスの軍人、将兵を窮地に陥れているとも言われる。⁽²²⁾大西洋、太平洋、インド洋から南氷洋近くまで展開する世界第3位の海軍は、フランスの誇るところではあるが、原子力潜水艦のような閉鎖された空間で長期間にわたる士気の維持には、カトリックも潜在的には重要な役割を果たしていると推定される。総合軍事力では第5位に落ちるフランスにとって、潜水艦に依存するところは少なくない。勿論、フランスは公的な面では政教分離が貫徹されており、ライシテ (la laïcité／非宗教性／世俗性) は重視されているが、精神的内面ではカトリックの影響力を深く受ける人々も少なくない。

フランシスコ教皇の説くところからは、そのようなインパクトを覚悟しての平和への強い祈りが伝わるようであった。

一方、フランスや日本を含む世界のメディアの中には、核の抑止効果を容認していたパウロVI世やヨハネ・パウロII世の論調との断絶を糾弾するものがあり、また核廃絶論は非現実的であるとして嘲笑に近い反応を見せたものもあった。

しかし、このような批判的論調には、共通して欠けている、ないしは忘れた振りをしているかの

如き点が見受けられた。

一つは核抑止効果があるとされた冷戦時代が終結して、既に30年程が経過し、環境は変化していることへの認識不足である。1982年、ヨハネ・パウロⅡ世が国連において、核抑止について容認したとされる。だが、それはあくまでも「現在の状況においては、必要悪として…」⁽²³⁾と述べたのであって、そこでいう「現在」とは今から三十数年に遡る時点であり、論議されるべきは現時点および未来の状況にあっても必要悪⁽²⁴⁾であるのか、否かとの問題である。

第2の点は、集団的ないしは地域的防衛を担保していた国家間連携の安定性が失われて来ている事実である。更に、核保有国ないしは潜在的保有可能国が拡散拡大し、偶発的使用や事故を阻止するための方策をとる必要性が高まっている。テロの危険性が増大する中で、抑止の対象が不透明になってしまっているのだ。このような動向に対応するため、緻密な検討の積み重ねが行われた。教皇の発言原稿のドラフティング作業に際してもバチカン内部は勿論、その外交部門でも周到な準備作業を経ての判断に至っているのである。

第3の点は、核兵器禁止条約は2017年7月7日に国連で採択されたが、バチカンはSaint-Siège (Sancta Sedes/Holy See/聖座)の名において、2017年9月20日、この核兵器禁止条約に率先して署名および批准をしており、核兵器禁止条約の締約国となっている。⁽²⁶⁾核兵器禁止条約は、そのタイトルの「核兵器の開発、実験、製造、備蓄、移譲、使用及び威嚇としての使用の禁止ならびにその廃絶に関する条約 (Convention on the Prohibition of the Development, Testing, Production, Stockpiling, Transfer, Use and Threat of Use of Nuclear Weapons and on their Elimination)」⁽²⁷⁾にあるとおり、核の廃絶を志向している。その条約批准国の長である教皇が長崎で核廃絶を訴えるのはむしろ当然で、唐突なことではないのは明らかだ。

そして、何にも増して大切なことは、バチカンのよって立つところの宗教的な信条に沿って考察してみることであろう。

フランシスコ教皇は機会あるごとに「平和は求めなければ得られない」⁽²⁸⁾と繰り返している。この言葉は、マタイによる福音書にある「求めなさい。そうすれば与えられる。⁽²⁹⁾(求めよ。さらば与えられん)」を思い起して、一緒に平和を求めることへの勧奨なのだ。しかし、平和は与えられないのではと躊躇する時には、マタイが続ける「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、一⁽³⁰⁾(狭き門より入れ)」の意味するところに思いを馳せれば良いのではないだろうか。

6、平和の道具に

2019年11月24日、長崎の爆心地公園での核兵器についてのメッセージを結ぶにあたり、フランシスコ教皇はアッシジの聖フランシスコに由来する平和を求める祈りを朗読し、「私たち全員の祈りとなると確信しています」と述べた。

「主よ、わたしをあなたの平和の道具としてください。⁽³¹⁾

憎しみがあるところに愛を、いさかいがあるところにゆるしを、(…)

闇に光を、

悲しみあるところに喜びをもたらすものとしてください。」

この祈りにある「平和の道具 (un instrumento de tu paz / un instrument de ta paix) としてください」との思いに貫徹された、正味13分弱にわたる、力強いメッセージであった。

同時に、教皇の右手前に置かれた写真『焼き場に立つ少年』⁽³²⁾への反応は好意的なものが多かった。テレビ映像や新聞、ウェブを通じて世界に伝えられた、悲しみを噛み殺すように毅然として直立する少年の名前は今もって不明であるが、長崎に原爆が投下された結果を直視するようにと、2017年末の降誕祭前からバチカンが配布しているものである。「一つのイメージは沢山の言葉よりも感動させる」とした教皇の指示によるものだったと報じられている。教皇は今回のメッセージを述べた後、その写真を撮影した故ジョー・オダネル (Joe O'Donnell) の子息と謙虚な握手を交わしていた。

ただ、メッセージそのものへの反応は複雑なものだった。ウェブ上にアップされた新聞記事への読者の書き込みや YouTube (ユーチューブ)、Dailymotion (デイリーモーション) へのコメントは賛否こもごもで、平和を訴えることの難しさを感じさせる。むしろ、原爆が第2次世界大戦の終結に果たした役割を再評価し、その抑止効果を信奉する声が多かったのも事実である。また、カトリック信者の少ない、かつ第2次大戦中に残忍さを示した日本で何故、と言った辛辣な意見も散見された。国連等の国際機関で行われている戦闘や戦争の事実解明が、和解を促進するどころか、両当事者間の和解をますます困難なものにしてしまったりする現象が、ここでも見受けられたりした。

7、和解と「ヨーロッパの日」

恩讐を乗り越えて、和解し、平和を築くことは難しい。しかし、それに成功した貴重な先例がある。19世紀からの百数十年に喩々とする対立を経て、小さな一步一步から強固な連帯の結束を成し遂げた独仏関係は、その好例の一つであろう。

今日、欧州連合 (EU) で、「ヨーロッパの日」とされているのは5月9日である。EU と言えば、このところ英国のブレグジットで巷を騒がせているところもあるものの、何となく外野席の雑音に過ぎないような面があるのも、EU の中心に不動の独仏の連帯があるからと思われる。19世紀初頭から20世紀にかけての険悪な状況がきれいに払拭された、ここ70年間の安定した連携ぶりである。こんな関係が確立したきっかけになった日付が1950年5月9日であり、これを記念して今日のEUでは5月9日をヨーロッパの日と呼んでいるのだ。この1950年5月9日は、当時フランスの外相だったロベール・シューマン⁽³⁴⁾ (Robert Schuman) が、後にEUの母体ともなる欧州石炭鉄鋼共同体を創設したいとの宣言を行った日である。その宣言に先立って、シューマンは時のドイツ首相のコンラット・アデナウアー (Konrad Adenauer) に「よちよち歩きのヨーロッパ (Europe des petits pas)⁽³⁵⁾」を、独仏両国の和解の最初の印として、創設するとのアイデアを提示して内諾を得たと言う。一步一步 (pas à pas) とは言いながらも、当初から、独仏間の戦争を「想定できなだけでなく、物質的に不可能 (non seulement impensable, mais matériellement impossible / nicht nur undenkbar, sondern materiell unmöglich)」にするため、「平和の保全に不可欠なヨーロッパ連邦 (une Fédération européenne indispensable à la préservation de la paix)」を創設するという構想だったのである。この宣言が出された1950年の5月9日の趣旨に、独仏に加え、ベネルックス3国とイタリアが賛同して、「よちよち歩きのヨーロッパ」が歩み出す切っ掛けとなったのである。

この構想は素晴らしかった。また、一国の外相の話に、他国のトップが乗るのもすごい。更に、

ルクセンブルグ生まれでドイツ国籍、ドイツ育ちで、フランス語は学校で学んだとは言え母語ではなく、33歳となった1919年にフランス国籍を取得した人物を、第2次大戦後の閣僚評議会議長⁽³⁶⁾や外相に登用したフランスも見上げた国と感じる。また、相方のドイツのアデナウアーの対応も素晴らしい。後にアデナウアーがドゴールの田舎の家に招かれた際、ドイツ人に給仕するのは嫌だと拒否していた家政婦が、一転ファンになってしまったとの微笑ましいエピソードが実感される人柄が偲ばれる。

小さな一步一步を踏みしめながら築かれて行くヨーロッパ統合への道を辿ることは、希望と夢に満ちていて心地良い。逆に、ブレグジットのような後ろ向きの話がダラダラと続く現況は、アイルランド問題一つを考えただけでも、暗くなってしまうものだ。このような平和と和解のプロセスではトップダウン方式によるメディア戦略が重要とされるものの、トップを間違えるととんでもないことになる。この話は、長くなってしまうので、別の機会に譲りたい。

ボトムアップの積み上げも大切であるが、個人と個人の間の和解はともかく、国と国、あるいは民族、異文化等の複雑に絡み合う関係では、大所高所からの視点に立った輿論喚起が必須である。そして、この役割を建設的に担うのがメディアであって欲しい。

8、平和と和解のメディアへ

フランスのル・モンド紙は2019年8月中旬から下旬にかけ、「どのように和解するか？(Comment se réconcilier ?)」⁽³⁷⁾とのテーマで6回にわたって特集を組むと共に、論議の機会を提供した。話題は、友人や夫婦の間の諍いや、レイモン・アロンとサルトルの仲違いのような問題から、冷戦後の各地での紛争の悲劇の現状把握の困難さ、和解の成功・不成功の判断の微妙な複雑さ、更にはそれらの困難さや微妙な複雑さをどう克服するかと言ったテーマが取り上げられた。

そこでは、「相手を侮辱、虐待してはいけない。そんなことをしたら、相手を失うだけでなく、共にした歴史まで失われてしまう」⁽³⁸⁾との何気ないアドバイスも出ていた。これを聞きながら、近隣諸国との諍いを競って煽り立てる某国のメディア状況を想起して、暗澹たる思いがした。

本稿では、冒頭にフランシスコ教皇の平和への祈りを追ってみた。教皇の声を伝えることを趣旨とするバチカンのメディアは、このところ、澁刺とした活況を示している。「教皇のイメージにすべてを賭けるという方針がフランシスコとは効果的にうまく機能している。後継者が内気だったり、メディアティックでなくなったら、どうしよう」⁽³⁹⁾とのバチカン・メディア担当者の喜びと今後への懸念も伝えられている。

ただ、ウェブ上などに見受けられる平和への努力の足を引っ張るような後ろ向きの声を、前向きなものにリードして行く責任こそ新聞やテレビ・ラジオなどの基幹メディアが担うべきものと思われる。

小さな一步一步からヨーロッパ統合の道は拓かれた。小さな一步を、大きな一步と誇大に捉え、報じることは間違っている。しかし、小さな一步の重要性は明確に認識され、方向性は正しく伝達される必要があるのだ。

なお、脚注に付したウェブ等の参照日時は、特に記載の無い限り、2020年1月5日 23:00JST 現在のものである。

- (1) “La pace è un bene prezioso, oggetto della nostra speranza, al quale aspira tutta l’umanità (La paix est un bien précieux, objet de notre espérance auquel aspire toute l’humanité) ”in Messaggio del Santo Padre Francesco per la celebrazione della 53ma Giornata Mondiale della Pace, 1° gennaio 2020 (La paix, chemin d’espérance : dialogue, réconciliation, et conversion écologique, Message du pape François pour la 53e Journée mondiale de la paix,).
- (2) “à la paix et à la réconciliation ”
https://www.lemonde.fr/societe/article/2019/12/25/a-noel-le-pape-francois-celebre-l-amour-gratuit-gage-de-paix-et-de-joie_6024002_3224.html
- (3) <https://www.vaticannews.va/ja/pope/news/2019-12/urbi-et-orbi-natale-del-signore-2019.html>
- (4) <https://www.bbc.com/news/world-europe-50911452>
- (5) https://elpais.com/internacional/2019/12/25/actualidad/1577278593_873804.html
- (6) <https://www.courrierinternational.com/article/religion-le-pape-francois-et-les-tenebres-du-monde>
- (7) フランシスコ教皇は、東京からローマへの帰路の機中で随行記者団に対し、核兵器保有の不道徳性について、公教要理 (catéchisme) に盛り込む意図を明言した、とル・ポワン誌等が報じている。
 L’immoralité de la “possession” d’armes atomiques sera dans le catéchisme de l’Eglise catholique, AFP, le 26/11/2019.
https://www.lepoint.fr/monde/le-pape-quitte-le-japon-ou-il-a-martele-son-rejet-de-l-arme-nucleaire-26-11-2019-2349525_24.php#
- (8) <https://www.vaticannews.va/ja/pope/news/2019-11/papa-in-giappone-nagasaki-hypocenter-park-20191124.html>
- (9) <https://www.vaticannews.va/ja/pope/news/2019-11/papa-in-giappone-hiroshima-incontro-per-la-pace-20191124.html>
- (10) *ibid.*
- (11) “C’est au Vatican que Greta Thunberg a continué son combat pour sauver la Terre du réchauffement climatique. L’adolescente de 16 ans a rencontré le Pape François, qu’elle a félicité pour son soutien.
 “Merci d’être engagé pour le climat et de dire la vérité. Ca signifie beaucoup.”
 De son côté le Saint Père lui a conseillé de poursuivre son action.
 “Que Dieu te bénisse, continue à travailler, continue. Va de l’avant.””
<https://fr.euronews.com/2019/04/17/au-vatican-greta-thunberg-remercie-le-pape-pour-son-engagement-pour-la-planete>
- (12) “Les journalistes peuvent jeter de l’huile sur le feu et contribuer à la propagande durant les périodes de conflit, mais ils peuvent aussi jouer un rôle pacificateur dans les guerres civiles, le reporter n’étant autre que le miroir de sa propre société.”
https://www.lorientlejour.com/article/755738/Un_journalisme_de_paix_pour__encourager_la_reconciliation_apres_les_conflits.html
- (13) <http://www.zakweli.com/journee-mondiale-des-communications-sociales/>
- (14) 聖書：新共同訳、日本聖書協会、1989、p.(新)182.
- (15) “Je voudrais donc adresser une invitation à promouvoir un journalisme de paix, n’ayant toutefois pas

l'intention avec cette expression d'évoquer un journalisme «débonnaire» qui nie l'existence de graves problèmes et assume des tonalités mielleuses. J'entends, au contraire, un journalisme sans duperies, hostile aux faussetés, aux slogans à effet et aux déclarations emphatiques; un journalisme fait par des personnes pour les personnes, et qui se comprend comme un service à toutes les personnes, spécialement à celles-là – qui sont la majorité au monde – qui n'ont pas de voix; un journalisme qui ne brûle pas les nouvelles, mais qui s'engage dans la recherche des véritables causes des conflits, pour en favoriser la compréhension à partir des racines et le dépassement à travers la mise en route de processus vertueux; un journalisme engagé à indiquer des solutions alternatives à l'escalade de la clameur et de la violence verbale.”

<https://eglise.catholique.fr/vatican/messages-du-saint-pere/451741-la-verite-vous-rendra-libres-jn-8-32-fake-news-et-journalisme-de-paix/>

- (16) 聖書；新共同訳、日本聖書協会、1989、p.(新)357.
- (17) 聖書；新共同訳、日本聖書協会、1989、p.(旧)108.
- (18) 吉岡栄二郎；『焼き場に立つ少年』は何処へ—ジョー・オダネル撮影『焼き場に立つ少年』調査報告』、長崎新聞社、2017年6月、pp.107+37。
- (19) <http://www.zakweli.com/journee-mondiale-des-communications-sociales/>
- (20) La mémoire à transmettre, au coeur de la Journée 2020 des communications sociales
La mémoire, comme réalité « dynamique » septembre 28, 2019 16:42 Anita BourdinMedia
“ «Afin que tu puisses raconter à ton fils et au fils de ton fils » (Exode 10,2). La vie se fait Histoire »:
c'est le thème du message du Pape François pour la 54ème Journée mondiale des Communications sociales, en 2020. ”
<https://fr.zenit.org/articles/la-memoire-a-transmettre-au-coeur-du-message-pour-la-journee-2020-des-communications-sociales/>
cf. <https://www.cbcj.catholic.jp/2018/05/06/16619/>
- (21) “Au terme de ce processus, « irréversible » ne cesse-t-on de rappeler au SPC, la vénérable radio fondée en 1931 par Guglielmo Marconi, l'inventeur de la TSF, aura profondément changé de visage. « Radio Vatican a toujours été à la pointe de la technologie”
<https://www.la-croix.com/Religion/Monde/A-Radio-Vatican-reforme-passe-2017-01-24-1200819682>
- (22) “En s'élevant contre l'arme nucléaire, le pape François met les officiers français dans l'embarras”
<https://www.lopinion.fr/edition/international/pape-francois-plaide-reconciliation-24965>
<https://www.dailymotion.com/video/x7ogitl>
- (23) <https://www.la-croix.com/Monde/A-Nagasaki-pape-Francois-demonte-principe-dissuasion-nucleaire-2019-11-24-1301062327>
<https://www.la-croix.com/Religion/Catholicisme/Pape/A-Nagasaki-cri-pape-contre-larme-atomique-2019-11-24-1201062349>
- (24) <https://www.doctrine-sociale-catholique.fr/quelques-themes/317-dissuasion-nucleaire>
- (25) “Le Saint-Siège a toutefois voté pour la première fois le 7 juillet 2017 en faveur du Traité d'interdiction des armes nucléaires.” (observateur permanent à l'ONU)

核兵器禁止条約のため、バチカン (Le Saint-Siège) は 2017 年 7 月 7 日、賛成票を投じているが、これはバチカンが国連で行使した最初の投票となった。なお、バチカンの公用語はラテン語およびイタリア語だが、外交用語はフランス語、スイス衛兵はドイツ語を用いている。

<https://www.diplomatie.gouv.fr/fr/dossiers-pays/vatican-saint-siege/presentation-du-vatican/article/presentation-du-vatican>

- (26) “En 2017, François a franchi un cap. Il a condamné la possession des armements nucléaires et l’Etat du Vatican, abandonnant sa posture habituelle d’observateur aux Nations unies, a signé le projet de traité sur leur interdiction (TIAN), comme 132 autres Etats (mais aucun Etat possesseur de la bombe ni leurs alliés, dont le Japon).”

https://www.lemonde.fr/international/article/2019/11/24/la-dissuasion-nucleaire-est-une-fausse-securite-denonce-le-pape-a-nagasaki_6020313_3210.html

- (27) The Treaty was adopted on 7 July 2017 by the United Nations conference to negotiate a legally binding instrument to prohibit nuclear weapons, leading towards their total elimination, held in New York from 27 to 31 March and 15 June to 7 July 2017. In accordance with its article 13, the Treaty shall be open for signature to all States at United Nations Headquarters in New York as from 20 September 2017

https://treaties.un.org/Pages/ViewDetails.aspx?src=TREATY&mtdsg_no=XXVI-9&chapter=26&clang=_en

- (28) “On n’obtient pas la paix si on ne l’espère pas”

<https://www.diocese-avignon.fr/Message-du-Pape-Francois-pour-le-1er-janvier-2020.html>

- (29) マタイによる福音書 7 章 7 *in* 聖書；新共同訳、日本聖書協会、1989、p.(新)11.

- (30) *ibid.*, p.(新)12.

- (31) “fais de moi un instrument de ta paix / haz de mí un instrumento de tu paz”

なお、現在までに明らかにされているこの祈りの最も過去に遡る詩文は、1912 年のフランス語によるもので、下記のとおりである。

Seigneur, fais de moi un instrument de ta paix.

Là où il y a de la haine, que je mette l’amour.

Là où il y a l’offense, que je mette le pardon.

Là où il y a la discorde, que je mette l’union.

Là où il y a l’erreur, que je mette la vérité.

Là où il y a le doute, que je mette la foi.

Là où il y a le désespoir, que je mette l’espérance.

Là où il y a les ténèbres, que je mette votre lumière.

Là où il y a la tristesse, que je mette la joie.

Ô Maître, que je ne cherche pas tant à être consolé qu’à consoler,

à être compris qu’à comprendre,

à être aimé qu’à aimer,

car c’est en donnant qu’on reçoit,

c'est en s'oubliant qu'on trouve,
 c'est en pardonnant qu'on est pardonné,
 c'est en mourant qu'on ressuscite à l'éternelle vie.

La Clochette, n° 12, déc. 1912, p. 285.

また、日本語訳では「あなたの平和の道具にしてください。…」のように、「あなた」との訳語を用いており、やや丁寧で遠慮がちに呼びかけられている例が多い。しかし、フランス語版では様々な改変が加えられていても二人称単数型の *tutoyer* を用いての、より身近な存在への呼びかけで主との近しい崇拜関係を示す形で綴られ、朗読されている場合が殆どである。もっとも、2人称複数型の *vous* および *voire/vos* を用いた *vouvoyer/vousoyer* を用いているものも存在する。

- (32) <https://www.cath.ch/newsf/a-bord-de-lavion-papal-distribution-dune-photo-de-nagasaki/>
- (33) “une image remue plus que mille paroles”, *ibid.*
- (34) https://europa.eu/european-union/about-eu/symbols/europe-day/schuman-declaration_fr
- (35) <https://www.lefigaro.fr/international/2009/11/10/01003-20091110DIMWWW00609-les-grandes-etapes-de-la-reconciliation-franco-allemande.php>
- (36) ロベール・シューマンは第4共和政のビドー内閣で、1946年に財務相に就任、1947年末には当時の首相に当たる閣僚評議会議長（Président du Conseil des ministres）となった。1948年7月に外相に就き、一時的には閣僚評議会議長を兼ねていた。
- (37) https://www.lemonde.fr/idees/article/2019/08/25/comment-se-reconcilier-retrouvez-les-six-episodes-de-notre-serie_5502671_3232.html
- (38) “Ne pas humilier, ne pas maltraiter l'autre. Parce que si nous cédon, nous ne perdons pas seulement l'autre, l'histoire que nous avons partagée”
https://www.lemonde.fr/festival/article/2019/08/19/claime-marine-avoir-le-courage-de-rompre-est-souvent-le-premier-moment-d-une-reconciliation-avec-soi-meme_5500563_4415198.html
- (39) “Tout miser sur l'image du pape fonctionne effectivement bien avec François, continue ce spécialiste des médias. Mais si son successeur est plus timide, moins médiatique, comment fera-t-on ?”
<https://www.la-croix.com/Religion/Monde/A-Radio-Vatican-reforme-passe-2017-01-24-1200819682>